

# 知求会ニュース

2013年4月

第45号

## ◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

高橋 豊(TAKAHASHI Yutaka) (国際社会研究専攻・1期生)さんが、2013(平成25)年3月18日(月)に杏林大学大学院 国際協力研究科 博士後期課程で、以下のように学位を取得されました。なお、知求会ニュース今号に「博士録」コーナーで博士論文の概要を掲載しています。

高橋 豊「日本の文化外交の将来戦略」

博士(学術) : 博乙国第8号

## ◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

崔 寶允(国際学研究専攻・3期生)さん、金 多希(国際学研究専攻・2期生)さん、金 裕美(国際学研究専攻・2期生)さんと蔡 佳樹(国際学研究専攻・2期生)さんが、3月25日(月)に戸川正人さん、方 小贇さん、サ ソチアさん、岡本義輝さんに続いて第5号・第6号・第7号・第8号の博士号学位を授与されました。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(社会学)(一橋大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 2名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)の計15名です。

## ◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

中村能盛(国際文化研究専攻・13期生)さんが、名古屋大学大学院 文学研究科 博士後期課程 人文学専攻 第2フランス文学研究室に進学されます。

スバゴジェワ・アセリ・オスコナリエブナ(国際文化研究専攻・13期生)さんと趙 無忌(国際文化研究専攻・13期生)さんが、宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻に進学されます。

## ◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2013(平成25)年3月25日(月曜日)午後1時10分から国際学部4階大会議室にて、2012年度学位記手渡し式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第13期生の黄 洪緒さん・白 宝花さん・南 勇文

さん・李 慧博さんの4名でした。国際文化研究専攻の第12期生道日娜さん、第13期生の江田明日香さん・王 文俊さん・胡 哈斯其木格さん・コピローワ オーリガさん・朱 雅雯さん・朱 麗亜さん・周 曉璇さん・肖 江さん・趙 無忌さん・中村能盛さん・頼 依彪さんの12名でした。国際交流研究専攻の第6期生半田昌弘さん・佐々木弘恵さん・ムニヤルニーラジさん、第8期生季 新さん・呉 昊さん・米田 亨さん・李 静さんの7名でした。計24名でした。

17年度より、学業優秀者に贈られる宇都宮大学奨学金(奨励賞)に、国際学研究科の1名として趙 無忌(国際文化研究専攻)さんが受賞されました。

2013(平成25)年3月29日(金曜日)午後1時00分から国際学部1階第2会議室にて、2012年度学位記手渡し式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第12期生 頼 小弋さん、国際文化研究専攻の第12期生鈴木祥夫さんと第13期生のスバゴジェワ アセリ オスコナリエブナさん、国際交流研究専攻の第7期生鄭 岳雲さんと第8期生の孟 麗娜さん・劉 天嬌さんの6名でした。総計29名でした。

## ◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	1名	・社会人	2名	・外国人	1名	計	4名
国際文化研究専攻	一般	1名	・社会人	0名	・外国人	5名	計	6名
国際交流研究専攻	一般	1名	・社会人	0名	・外国人	3名		
	国際交流	・国際貢献活動経験者		1名	計	4名	合計	14名

## ◎ 田巻松雄国際学研究科長・国際学部長選出

田巻松雄先生が4月1日から任期2年間で選出されました。詳細は国際学部だよりの掲載記事8・9を参照して下さい。

## ◎ 教職員人事異動

### 内山 雅生名誉教授

国際社会交流研究講座の内山先生が、3月末日付で定年退職されました。宇都宮大学には1994年4月から19年間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

## \* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第12号(2013年2月20日)

特集 外国につながる子どもフォーラム 2012

第1部 「深く深い良い話をしよう—学生による白熱教室」

国際学部国際社会学科4年 海野杉江

第2部 3年間のHANDSプロジェクトの成果と課題 司会：松本 敏 (教育学部教授)

□外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣事業について

・事業説明及びアンケート調査結果報告

(辻 猛司) スクールサポートセンターコーディネーター

・派遣先校より：宇賀神玲子 (宇都宮市陽東小学校教諭)

那花幸子 (益子町立益子中学校教諭)

・HANDSプロジェクトより：若林秀樹 (国際学部特任准教授)

□HANDSプロジェクトの成果・課題・展望

パネリスト：川口直巳 (愛知教育大学助教、研究分野：日本語教育学、

外国人児童生徒の教科学習理解)

金本節子 (茨城大学教授、研究分野：日本語教育、異文化コミュニケーション)

第3部 多言語による高校進学ガイダンスのあり方を考える

司会：原田真理子 (佐野市日本語教室指導助手・国際学部附属多文化公共圏センター研究員)

パネリスト：大根田佳夫 (真岡市教育委員会指導主事)、

萩原孝夫 (大田原市教育委員会指導主事)

山本幸子 (那須塩原市教育委員会指導主事)、

田巻松雄 (研究会代表、国際学部教授)

愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルームの取り組み

愛知教育大学 教育学部 現代学芸課程 日本語教育コース 助教 川口直巳

第3回外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会報告

国際学部教授 HANDSプロジェクト研究代表 田巻松雄

「言葉と出会いの力を信じて」

国際学部3年 加藤 ジョランダ

「第3回外国人児童生徒支援会議」が開催されました

国際学部 特任准教授 若林秀樹

進め日本語教室第4回

宇都宮市立清原中央小学校教諭 田崎啓三

第4回グローバル教育セミナー報告

大学院国際学研究科博士後期課程/国際学部附属多文化公共圏センター研究員 根本久美子

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記9

これからも続けていきたい

教育学部 技術教育専攻3年 大久保直貴

知ってほしい「外国人児童生徒問題」

国際学部国際社会学科 3年 曾 徳機

一年間の学習支援を経て感じること

国際学部国際文化学科 4年 梅木 都

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

『中学教科単語帳』（日本語□ポルトガル語、別冊つき）刊行

『中学教科単語帳』（日本語□ポルトガル語、別冊つき）ご希望の方の入手方法

平成 24 年 10 月から平成 25 年 3 月までの活動

## ◎ 平成 23 年度 第 2 回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2013（平成 25）年 2 月 27 日（水）午後 4 時から、コミュニティフロア（UU プラザ 2 階）にて、平成 24 年度第 2 回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・石田朋靖 理事・井本英夫 理事・茅野甚治郎 理事・加藤幹彦 理事の大学側 5 名と事務局担当者 4 名、土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・柴田 毅 教育学部同窓会会長・小林哲夫 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・清水由行 工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・竹永 博 農学部同副会長の同窓会側 7 名でした。議事内容は、協議事項として、特になし。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

## ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊（平成 24 年 12 月 24 日発行）7 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「選挙その後の報道に期待」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん（国際社会研究専攻・4 期生）の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊（平成 25 年 2 月 4 日発行）13 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「実名報道の必要性示せ」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん（国際社会研究専攻・4 期生）の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊（平成 25 年 3 月 11 日発行）6 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「「限界集落」の説明が重要」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん（国際社会研究専攻・4 期生）の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 朝刊（平成 24 年 10 月 11 日発行）3 面に、「子ども守るために」の内容で、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター「福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」が紹介されました。
5. 下野新聞 朝刊（平成 24 年 10 月 14 日発行）1 面に、「放射能「心配」9 割」の内容で、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター「福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」が紹介され、清水奈名子先生のコメントが掲載されました。

6. 下野新聞 朝刊(平成24年10月14日発行)2面に、「県民は隠れた被災者」の内容で、**宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター「福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」**が紹介され、**清水奈名子**先生のコメントが掲載されました。
7. 下野新聞 朝刊(平成24年11月2日発行)25面に、「地域と世界つながろう 6日グローバルセミナー」の内容で、**多文化公共圏センター**と**生涯学習教育研究センター**の記事が紹介されました。
8. 読売新聞栃木版 朝刊(平成24年11月9日発行)35面に、「非常時の弱者保護を考える」の内容で**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
9. 下野新聞 朝刊(平成24年11月17日発行)8面に、「私の争点—とちぎ知事選 下」のコーナーにおいて、「議会との向き合い方論点」の内容で**中村祐司**先生、「処分場問題もっと議論を」の内容で**北島 滋**先生の記事が掲載されました。
10. 読売新聞栃木版 朝刊(平成24年11月9日発行)32面に、「本当の平和考える」の内容で、**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
11. 下野新聞 朝刊(平成24年11月28日発行)4面に、「外国人の子の教育を考えよう」の内容で、**HANDS(ハンズ)プロジェクト**が紹介されました。
12. 読売新聞栃木版 朝刊(平成24年11月30日発行)34面に、「宇都宮大・読売講座詳報□戦争と平和と3・11～当事者の声から学ぶ国際学」と題して、「個人尊重が平和の条件」の内容で**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
13. 下野新聞 朝刊(平成24年12月7日発行)25面に、「原発事故に学ぼう未来」の内容で、**国際学部**と**多文化公共圏センター**の記事が紹介されました。
14. 下野新聞 朝刊(平成24年12月12日発行)13面に、「地論 26」コーナーで、「宇都宮市 フェアトレード・タウンを目指して 若者に関心を持ってほしい」の内容で、**重田康博**先生の記事が掲載されました。
15. 下野新聞 朝刊(平成24年12月16日発行)27面に、宇都宮大、県内避難者アンケート「交通費助成」9割要望」と題して、「負担感が浮き彫りに」の内容で、**多文化公共圏センター**の記事が掲載されました。
16. 読売新聞栃木版 朝刊(平成25年1月18日発行)31面に、「タンザニア 自然との共生」の内容で**阪本公美子**先生が紹介されました。
17. 朝日新聞栃木版 朝刊(平成25年1月25日発行)29面に、「ポルトガル語の中学教科単語帳」と題して、「宇都宮大のプロジェクトが作成」の内容で、**HANDS(ハンズ)プロジェクト**の記事が掲載されました。
18. 読売新聞栃木版 朝刊(平成25年1月27日発行)27面に、「タンザニアの今を解説」の内容で、**阪本公美子**先生の記事が掲載されました。
19. 読売新聞栃木版 朝刊(平成25年2月8日発行)31面に、宇都宮大・読売講座詳報□アフリカに学ぶ自然と人間の関係学」と題して、「タンザニア自然と生きる」の内容で**阪本公美子**先生の記事が掲載されました。

20. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 2 月 11 日発行) 23 面に、「英語でニュースを読む」の内容で、**森谷亮太**さん(国際交流研究専攻・8 期生)が紹介されました。
21. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 2 月 11 日発行) 23 面に、「外国人の交流拠点に 鹿沼・愛称は「コミニエテ」 多文化共生センター開所」の内容で、記事が掲載されました。
22. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 3 月 6 日発行) 3 面に、「汚染の不安予想以上 行政は積極的な対策を」の内容で、**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
23. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 3 月 9 日発行) 3 面に、「「母子避難家族」配慮を 宇大教員らのプロジェクト 復興庁に要望書」と題して、**清水奈名子**先生のコメントが掲載されました。
24. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 3 月 10 日発行) 23 面に、「宇大のプロジェクト 教科単語帳に第 3 弾 日本⇄ポルトガル語発刊」と題して、「児童生徒の 7 割カバー」の内容で、**HANDS(ハンズ)プロジェクト**の記事が紹介されました。
25. UU now30 号 (平成 25 年 3 月 20 日発行) 6・7 面に、「宇都宮大学地域貢献 REPORT」コーナーで、「グローバルな課題解決のため 大学と世界をつなぐ役割を目指す」と題して、**国際学部附属多文化公共圏センター**が紹介されました。

([http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu30/6\\_7.pdf](http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu30/6_7.pdf))

#### ◎ 国際学部だより

1. 下野新聞 朝刊(平成 24 年 10 月 6 日発行) 3 面に、「被災地忘れない」の内容で、国際学部 3 年**小野塚夕佳**さんの記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成 24 年 10 月 11 日発行) 1 面に、「被災地に光、語り合う」の内容で、国際学部 3 年**小野塚夕佳**さんの記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊(平成 24 年 11 月 1 日発行) 20 面に、「東南アジアの染色展示」の内容で、タイ語の非常勤講師である**泉田スジンダ**先生が紹介されました。
4. 下野新聞 朝刊(平成 24 年 12 月 12 日発行) 4 面に、「宇大でシンポ 原発事故後 未来探るベラルーシの教訓考察」の内容で、**国際学部と学生の実行委員会**が紹介されました。
5. 読売新聞栃木版 朝刊(平成 24 年 12 月 12 日発行) 34 面に、「北から南から」コーナーにおいて、「母国語で結婚報告」の内容で「ポルトガル講座」が紹介され、国際学部 2 年生の**高村 采**さんのコメントが掲載されました。
6. とちぎ朝日(平成 24 年 12 月 21 日発行) に、「パウリーニョ選手がポルトガル講座」と題して、国際学部 3 年生の**猿田莉奈**さんと国際学部 4 年生の**兼城凜子**さんのコメントが掲載されました。
7. 読売新聞栃木版 朝刊 (平成 25 年 1 月 29 日発行) 30 面に、「時評」コーナーで、「未来つくる「芽」育てる」の内容でとちぎユースサポーターズネットワーク代表理事・**岩井俊宗**さん(国際社会学科・7 期生)の記事が掲載されました。
8. 読売新聞栃木版 朝刊 (平成 25 年 2 月 1 日発行) 29 面に、「宇大国際学部長 田巻教授を選任」の内容で**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。

9. 下野新聞 朝刊（平成 25 年 2 月 1 日発行）4 面に、「国際学部長に 田巻氏を選出」の内容で田巻松雄先生の記事が掲載されました。

**研究室訪問 37** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 37 回には国際社会研究講座所属の内山雅生先生にお願いしました。

残念ながら、先生より執筆辞退の申し入れがありました。この頁は今後の対応を考慮して、欠番としておきます。

**博士録 18** 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 18 回目には高橋 豊さんをお願いしました。

### 「私の博士論文の書き方」

高橋 豊（博乙国第 8 号）

私は、2002 年 4 月に、杏林大学大学院国際協力研究科博士後期課程に進学し、途中、インドネシアの在外研究（2003 年 10 月～2004 年 3 月）を経て、2008 年 9 月に単位取得満期退学をした後に、研究生として学び、2012 年 6 月に論文を提出し、2013 年 3 月に博士号を取得した。

つまり、博士号取得までの最長記録と思われる。その理由は、当該論文は、「従来の文化政策論は芸術などの文化財保護政策論と広報外交を中心とした国際文化交流論の間に大きな断層があった」（佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文編『ソフト・パワーのメディア文化政策』、新曜社、14 頁参照）と感じて、両方を結びつけて考え、日本外交の課題としたことにある。

#### 1 博士論文の概要

- 1) テーマ：日本の文化外交の将来戦略
- 2) 論文の要旨

##### (1) 問題意識

日本は明治維新以降、現代にいたるまで、受容、反発、発信の変化を辿ることでソフト・パワーを身につけてきたのであり、かかるソフト・パワー重視の観点に立ち文化に力点を置いた文化外交を将来にわたって継続・強化して行くことが、日本の国益と同時に国際公益に寄与すると考える。

##### (2) 各章ごとの内容

#### 第1章 近代日本における文化外交の黎明

明治政府の要人や知識人は、西欧列強の衝撃的な「ソフト・パワー」を受けた。欧米留学者（洋行）は、その根幹がキリスト教であることに気づき、積極的に取り組んだ。初代文部大臣の森有礼（1847～1889）や洋行して改宗した新島襄（1843～1890）などである。新渡戸稲造（1862～1933）は、キリスト教中心の欧米社会に、「和魂」を説明すべく、『武士道』を著した。

## 第2章 多国間文化外交による国際社会への復帰

日本の戦後外交は、ユネスコ加盟への運動で始まった。ユネスコの設立理念は、国民の多くの共感を得た。つぎに、1955年のアジア・アフリカ会議では、中国やインドの動向に世界の耳目を集めたが、日本の高崎達之助代表（1885～1964）は、一般演説で、文化協力を強調した。

## 第3章 2 国間文化外交による外交の新展開

平和構築は文化外交の目標であり、平和構築の理念は「人間の安全保障」である。この理念は、日本は、経済外交だけでは国際社会の期待に応えられないと考え、小渕首相のもとで、構想を練り、2000年の国連のミレニアムサミットで「人間の安全保障」政策を示したことにある。さらに、緒方貞子が、2003年に、JICAの理事長に就任すると、「人間の安全保障」は、日本の国際援助政策として明確に打ち出された。

## 第4章 文化外交の現状分析と課題

ドイツ、英国、フランスや中国（孔子学院）の国際交流機関は、母国語の普及と自国文化の広報を積極的に行っている。これに対し、日本の国際交流基金について調査を試みた。限られた予算で効率的に行うには、日本語教育に注力することが重要であり、2010年に国際交流基金が「日本語教育スタンダード」を完成したことは一つの成果と考えられる。

## 第5章 文化外交の将来戦略

文化外交に関わる議論は、始まったばかりであるが、議論を深め、文化省の設置も検討課題にすべきであろう。

すでに、日本は、急激な少子高齢化に向かっており、文化予算の大幅な削減対象になりうる。そこで、文化庁が推奨する「歴史文化基本構想」に地方公共団体のみならず、地域住民が積極的に関わることが、日本文化の再生につながる。さらに、国家は、過疎と過密是正の都市計画を遂行できれば、対外文化政策に注力することが可能と考える。

### 3) 課題と反省

論文作成に大変時間がかかったが、逆に考える時間があつたため、学会での発表だけではなく、国際交流基金や文化庁のシンポジウムを積極的に聴講できた。また、松田教授（杏林大学）の指導を受けて、くずし字を読解して一次資料を活用し、宇都宮大学で集中講義を受けた石澤良昭先生から遺跡保存の現場で直接説明を受けたことで、課題を達成できた。さらに、論文の最終審査に友松先生に加わっていただいたことで、博士論文として完成できたことに、深く、感謝している。

（2013年3月18日原稿受理）

**知究人 22** 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 45 号の第 22 回目は、大阪大学大学院博士前期課程に進学された清水奈名子研究室 OG の倉本祐子さんをお願いしました。

### 「「みらい」へ動く」

大阪大学大学院 国際公共政策研究科 国際公共政策専攻  
博士前期課程 1 年 倉本 祐子

2012 年 3 月に宇都宮大学国際学部を卒業してから、1 年が経とうとしています。現在私は、大阪大学大学院で国際政治の勉強を続ける一方で、就職活動に励む毎日をご過ごしています。大学院進学という選択は、大学進学時から自分の中で決めていました。高校生のときに知った「国際公務員」という道に進むために、自分にとっては当たり前のような選択でした。

#### 【宇都宮大学から大阪大学大学院へ】

イギリスへの交換留学を経て 4 年の夏に帰国した私は、すぐに大学院への進学準備と卒論を進めることになりました。ゼミの担当教官である清水奈名子先生には、卒論だけでなく進路に関しても大変お世話になりました。複数の候補の中から、大阪大学大学院を選択した理由は、「雰囲気」と「カリキュラム」が魅力的だったことです。

雰囲気に関しては、「国際」というフィールドで活躍できる人材育成への熱心さをオープンキャンパスで感じました。また、国際政治・国際法・国際経済の 3 つの分野に関して基礎科目が用意されているという研究へのバックアップ体制や開講科目の内容が私の興味関心に合っていたことは、大きな決め手になりました。

#### 【大学院生活】

実際に入ってみると、政治・法律・経済それぞれ異なる分野で研究を進める学生と一緒に授業を受けることも多く、自分の専門以外の視点を新たに発見することができました。また、キャリアに関する授業も充実しており、去年の夏には国際協力機構(JICA)の研究所で 2 ヶ月間のインターンという貴重な経験もすることができました。研究分野や学生が多様であることと、学生に様々な機会を提供してくれる点は、大阪大学大学院の魅力だと思っています。

大学院では「保護する責任」という概念を中心に研究を進めています。特に「紛争予防」に興味があるため、保護する責任の下、国家の予防能力や保護能力の向上を目的として国際社会が支援する際に、どのような機関間の協力体制が効果的であるのかを修士論文では扱う予定です。当面は先行研究の収集が課題になりますが、政策レベルにまで落とし込んだ提案ができるよう、頑張っていきたいと思っています。

### 【1年間で振り返って】

大学院での1年間は、私にとって刺激に満ちた1年間でした。様々な関心を持った学生の中で気付かされることは多く、自分の未熟さを感じながら過ごしました。おかげで、常に向上心を持つことができたのではないかと思います。

キャリアに関しての考え方も広がりました。働く場所ではなく、どのような問題意識を持つのが重要であること、そして国連という場所は、その問題を解決するための手段の1つにすぎないということに気付かされました。この意識は、現在の就職活動でも重要だと思います。

### 【おわりに】

今回の投稿のお話を頂いたとき、後輩にとって私の話が役に立つならと思い、受けさせて頂きました。国際協力に携わろうと考えるとき、決して歩む道は1つではありません。アクターも多様であり、様々な関わり方があると思います。今回の私のケースは、その中の1つにすぎません。ただ1つお伝えできることがあるとすれば、とにかく動いてみることは大切だということです。やってみなければ分からないことは多くあります。そしてその度に自分の問題意識や観点も変わってきます。変化していく問題意識を大切にしながら、自分の将来と向き合ってみてください。皆さんにとって、今回の寄稿が何かのきっかけになることを願っています。

(国際学部 国際文化学科 2012年3月卒業生)

(2013年3月20日原稿受理)

**海外だより 16** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。内山研究室OBの佐藤友樹さんにお願いました。

### 「タイの文化と業務で気を付けていること」

Matehan Siam Lambda co., ltd. 佐藤 友樹

宇都宮大学国際学部国際社会学科第7期卒業生の佐藤友樹です。私は大学卒業後、現在の会社に入社し、2011年5月にタイに赴任してきました。社内の管理関係と日本本社とのコンタクトがメインの業務です。

まだタイに赴任して二年足らずでまだまだ勉強不足ですが、こちらの文化、考え方と私が注意している点等についていくつかご紹介させていただきたいと思います。

#### 1. サバーイの文化

サバーイとは元気や快適という意味のタイ語です。タイ人の価値観の根幹をなすものだと思います。

タイで仕事をする上で非常に気を遣う点です。彼らが職場関係でサバァイでないことを理由にやめていくことがあります。ですので、社内運動会やパーティーを定期的に行い、楽しい職場環境作りを意識することが重要だと感じています。他愛もない冗談も人間関係の構築には重要です。現在、タイ日系企業の一番の懸念事項は人材確保ですが、雰囲気の良い職場環境づくりは定着率を高めることにつながるのではないかと考えています。

## 2. プライド

これはどの国の人にも当てはまることかもしれませんが、人前で叱ることは絶対につつまなければならぬ行動です。

仮にそうした場合、彼らはプライドを大きく傷つけられたと感じ、最悪逆恨みされ、非協力的になります。私も何度か人前で注意し、関係を悪化させてしまったことがあります。大勢の前で叱り、他者に規範を示すという日本的な考え方は非常に危険です。私はなるべく一対一で理由を説明し、次からはこうしてほしいとお願いする形をとっています。

## 3. 現在完了形

私は基本的にタイ語でタイ人従業員とコミュニケーションを取っていますが、一番神経を使うのはこの「現在完了形」です。

タイ語で動詞の末尾に「レーオ」とつけば、「完了した」、という意味合いになるはずなのですが、彼らの「完了」と日本人の「完了」は時間的な意味合いが異なります。これは新聞記事の受け売りですが、「バスがバス停に到着した」という文章において、日本語では文字通り、バスはバス停に到着しています。が、タイ語では「もうすぐバス停に到着しそう」といった意味でも「レーオ」が使われます。業務中、できる限りは完了していることを自分の目で確認するようにしています。

## 4. 駐在員の暮らし

日本食材が入手しやすく、多種多様な日本料理が最も味わえる国の一つがタイではないでしょうか。バンコクでは、北は北海道、南は沖縄まで日本の各地域の料理が食べられます。現在日本駐在員の増加に伴い、次々に飲食店が進出しています。そういう意味では駐在員にとっては「天国」ではないでしょうか。私も本格的な日本ラーメンを恋しくなったときにはバンコクに行くことがあります。

以上、蛇足もありますが、私が感じたことです。

文化の壁を感じることも今でも多々ありますが、それを愚痴にこぼしても何も解決しません。彼らの行動背景を理解し、目的を達成するためにはどうすればいいか、ということを常に念頭に置くことが重要です。

宇都宮大学で様々な国の方々と交流し、授業の中で文化的背景を学べたことは大いに役立っていると、日々感じています。これから海外で働くことを考えている方々に参考にしていただければ幸いです。

(国際学部 国際社会学科 2005年3月卒業生)

(2013年3月20日原稿受理)

**海外留学今昔 09** 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、イギリスに留学した**和久井瞳**さんと**畑中彩実**さんをお願いしました。

### 「イギリス留学を振り返って」

和久井 瞳

中学生の頃から英語教師になりたいと思うようになり、英語圏への留学を漠然と考えるようになったのだが、イギリスを意識するようになったのは高校生の頃だったと思う。ロンドンの大学に進学する先輩から、視察旅行のお土産に真っ赤な2階建てバスの形をしたキーホルダーをもらったのだ。その小さいけれどずっしりとしたロンドンバスを手のひらにのせて眺めながら、異国での生活を想像すると心が躍った。

大学に入ってからさまざまな国の文化・社会について学び、その中でも日本と同じ小さな島国であるイギリスの伝統的な部分に惹かれた。幸運にも、2010年の8月から2011年の6月までイングランド北西部にあるセントラル・ランカシャー大学のファウンデーション・コースに交換留学することとなった。

このコースは留学生用のプログラムの一つで、大学で必要とされる学術的な英語力を培うためのカリキュラムが組まれている。論文の読み方・書き方や、リスニング、プレゼンテーションの技術を磨き、イギリス文化・社会に関する講義も受ける。先生方は親しみやすく、ユーモアたっぷりに、生徒たちと言葉のキャッチボールをしながら授業を展開していく。とにかく間違えてもいいから自分が持っている知識を最大限活用して発言した。課題はほとんど毎日出るが、その日に習った内容をじっくりと吸収する過程となり、純粋に英語学習が楽しいと感じた。

また、留学先で出会った友人との思い出も私の財産となっている。世界各国から集まる留学生や、日本語を外国語として学ぶ学生、大学の寮のフラットメイトなど、おそらく日本では出会うこともなかったであろう。

クラスではポーランドや、キプロス、ペルー出身の友達ができ、木曜日はよく一緒に学校の近場のパブに集まった。そのパブでは毎週木曜日にビール1杯が1ポンド(約140円)ぐらいで飲めるので、いつもの倍の学生たちでにぎやかになる。ジャーナリズムなどの専攻の異なる留学生や日本語を学んでいる学生も常連で、いつの間にか言葉を交わすように

なっていた。ヨーロッパ諸国やシンガポール、アメリカといった世界各国の学生の話すさまざまな英語を聴くことができ、以前にまして世界の言語にも興味を持つようになった。

寮では、1つのフラットに6人ぐらいで住むのが一般的のようで、キッチンと浴室、トイレは共同に使う。個人の部屋にも外から鍵をかけられるのでプライバシーは守られる。フラットメイトは全員イギリス人で、専攻は服飾や、演劇、地理学、スポーツ・テクノロジーとみんな違っていた。食事は個人で準備・片づけをするというのが私のフラットでのルールだったので、各自好きな時間に好きなものを食べる。ただ、キッチンに誰かの気配を感じると、私は部屋から出てキッチンへ向かった。キッチンには自然にみんなが集まってくる。ネイティブ同士の会話の速さに気後れもしたが、日本にいる家族や友人と離れて暮らす私にとって、なんとなく安心できて居心地のよい場所だった。

週末には、周辺散策をしたり、電車やバスを使ってイギリス国内を20ヶ所くらい訪ね、その土地の歴史や文化に触れたりした。また、長期休暇を利用し、ヨーロッパ諸国やアフリカのモロッコにクラスメイトと一緒に旅行の計画を立てて行った。

現地で出会った人たちとの共同生活や触れ合いを通して、人と人とのつながりの大切さをあらためて実感した。また、留学前より少したくましくなったと感じている。この経験から学んだことを心に刻み、次の目標に向かって自分のベストを尽くしたい。

(国際学部 国際文化学科 2013年3月卒業生)

(2013年3月20日原稿受理)

## 「12歳の夢」

畑中 彩実

中学生で英語の勉強を始めてから、留学は私の夢だった。小学校時代、教室に入れなかった時期があった私にとって、中学生から始まった英語は、他の科目で同級生に劣る自分に唯一自信を与えてくれるものだった。英語が好きで、英語の勉強が好きで、英語の勉強をしている間は自分に少しだけ自信が持てた。

それから8年後の大学3年の夏。私はイギリスにいた。一人で海外へ行く事は怖かったけれど、引込み思案で人に埋もれてしまう自分を変えるためにも、留学することを決めた。大好きな英語と新しい環境が自分を変えてくれると思ったから。

日本人が一人しかいないコースで授業が始まってからは、毎日が不安との闘いだった。他の留学生が積極的に授業に参加している中、一言も話せず3時間が過ぎてしまったこともあった。イギリスに来れば何かが変わるだろうと甘く考えていた自分が恥ずかしかった。待っていても誰も助けてはくれない。授業が始まってから数日後、町の電気屋でボイスレコーダーを買った。分からないまま過ぎていってしまう授業を録音し、授業以外の時間は図書館で授業の復習と課題を必死にこなした。辛い時期もたくさんあったが、「ここで動かなきゃ何も変わらない。後悔のないようにやりとおそう。」と自分に言い聞かせた。苦手だったパーティーにも参加し、英語を話す機会を作った。授業ではチャンスがあればできるだけ発言した。的外れな発言で恥ずかしい思いをしたこともあった。間違えることを

恐れて出来なかったこともたくさんあった。失敗しては落ち込み、周りより劣っていることに焦り、挑戦出来ずに後悔で終わる。その連続だった。

そんな日々が変わり始めたのは、留学してから4ヶ月が経った頃だったと思う。教授から「あなたには難しすぎて無理」と言われた授業の最初の課題で、クラスで一番の点数をもらった。次の課題でビリから3番目の点数だったことを考えると、それは本当にラッキーただただけかもしれない。しかし、腕試しで受けたTOEICでは留学前よりスコアが170点上がり、少しだけ自分の英語に対して自信が持てるようになった。英語を話すのがどんどん楽しくなっていったのはそれからだ。間違えるのを恐れるのではなく、自分がどこまで出来るか試してみたくなった。そして4月の授業最後の課題では、10分間のプレゼンテーションを一度も原稿を見ることなく、自分の言葉で終えることができた。教授が涙を流して褒めてくれたことは今でも覚えている。

イギリスでの留学で、私は変わったと思う。もちろん英語は上達し、自分に自信を持てるようになった。だがそれだけではない。何かが自分を変えてくれるのを待つのではなく、自分から変わるために行動を起こすようになった。それは留学を終えて3年が経とうとしている今でも変わっていない。そして、これからも私の大きな力になるだろう。留学を初めて夢見た12歳の自分は臆病で、憧れるものがあったても自分には無理だと立ち止まっていた。しかし、その小さな夢があったからこそ、今の私がいる。12歳の自分に感謝したい。もちろん、家族や友人にも。私が少しだけ大きくなって帰ってこられたのは、支えてくれた人たちがいてくれたからこそ。本当にありがとうございました。

私はこれからも夢を持って進化し続ける。イギリスでの思い出と共に。

(国際学部 国際文化学科 2011年3月卒業生)

(2013年3月20日原稿受理)

**キャリア指南 09** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第9回目には清水学研究室OGの吉田直子さんをお願いしました。

### 「国際協力に関心のある人へ」

吉田 直子

内閣府の青年国際交流事業をご存知でしょうか？この事業は、日本と世界各国の青年の交流を通じて、相互理解と友好を深め、広い国際的視野と国際協調の精神を養う機会を提供し、さまざまな分野で活躍できる青年の育成を目指しています。

私はこの事業のOGで、大学4年生の時に航空機派遣事業（派遣国：ミャンマー）に参加しました。当時は、23日間の日程でミャンマーを周遊し、ミャンマー青年との交流を深めたり、名所旧跡を訪問したりしました。振り返ってみると、この事業への参加は、私の人生にとって大きな転機となり、その後の教育や職業に生かされていくものとなりました。具体的には、この事業に参加した後、大学・大学院では、ミャンマーの社会開発に関心を

もって研究を行いました。大学院修了後は、ミャンマーに拠点を置く NGO や JICA の社会開発プロジェクトの計画、実施、評価に携わりました。

私の場合、内閣府の青年国際交流事業への参加が国際協力の分野でキャリアを形成するきっかけとなったわけですが、今日では内閣府の事業のほか、大学や NGO によるスタディーツアーや個人の海外旅行など、さまざまな機会があると思います。国際協力に関心をもつ方は、ぜひこうした機会を生かして、健康や安全には十分に気をつけながら、世界に飛び出し、世界は多様性に満ちていることを感じ取って頂きたいと思います。きっとメディアや本からは得られない体験ができ、それはその後の人生に活かされていくと思います。

国際協力との関連で、私が大切だと思うことは2つあります。1つ目は、相手に対する受容・共感の心を育てることです。国際協力では何よりも人が大切で、人の良し悪しはプロジェクトの質に影響します。そのため、プロジェクトにかかわる人を大事に育てるとともに、自分自身も成長していくことが大切であるといえます。2つ目は、自分の地域や世界の出来事に関心を持ち、自分の問題として共感し行動していく力だと思います。日々に余裕をもって生活することで、自分のことだけでなく、相手のことや地域のこと、世界のことにも目を向けていくことが、よりよい国際協力の実践に結びついていくのではないかと思います。

(2013年3月27日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2002年3月卒業生)

**フォーラム** 2013年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は寄稿予定者から投稿を辞退されたため、未掲載になります。

### EU 支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第7号の内容は、1 イタリア総選挙—新たな選挙のかたち 2 EU 支部だより これからも、よろしく！ です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

---

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** [chikyukai@yahoogroups.jp](mailto:chikyukai@yahoogroups.jp)

---